

提言

教師と生徒のあいだを開き拓く 多様な人の広がり

静岡大学教育学部教授 馬居政幸

一 先生に話すのは三%。

昨年十月以降、いじめをなくすには、との議論が重ねられ、数多くの提言が出された。その観点や処方とは共通である。教師の責任が問われることは共通である。問題となるいじめが学校を舞台に生じるとみなされる以上、当然かもしれない。だが、全国の教師にいじめを解消できる立場と力があるのか。何よりも、当事者である子どもたちが、いじめをなくす存在として教師を信頼しているのか。

○二年の秋、私はこの問いを秋田の中学生から突きつけられた。秋田県内の中学生二年生（一〇六二名 有効回収率：九四・六

%で、両者の差はやはり大きい。「様子をみて」と場合によって「をあわせれば」「先生」も五五・六%と過半数を超えるが、「友達」は八一・五%。信頼感の差は埋まらない。

自分のズック」ではどうか。「先生に話す」ことを「そうする」は三九・一%と増え、「たぶん」と合わせると六四・五%とかなり多くなる。だが、「友達」の「そうする」は六二・四%、「たぶん」をあわせた八三%と比較するとやはり少ない。

生徒の三人に一人は自分の靴を隠されても教師に話をしない。しかもこの調査は、大都市ではなく伝統的な地域社会の絆と人間関係が残るとされる秋田県内小都市での調査である。この結果の意味は重い。なにが先生と生徒の間の関係を阻んでいるのか。

2 「いじめない」と「許さない」の差

調査ではいじめをなくす「ために」、①先生と生徒が互いに相手に望むこと、②生徒が「自分でできること」、③教師が「力をいれたいこと」について、ほぼ共通する10〜12種の選択肢を用意し、「3つまで」選んでもらった。その結果、「教師自身が力を入れた」と「生徒が教師に望む」では、教師と生徒ともに次の3種が上位に選択される。

◎と中学教師（一九二名 有効回収率：七九・〇%）を対象に、小中高等学校の先生方（秋田教育者クラブ）とともに実施した「いじめ調査アンケート」の集計結果を目にしたときである。五年前の調査だが結果の重みはむしろ増加している。実証データに基づき、子どもたちの教師と学校への不信感の根を掘り起こす論議と対策を、今なお見出せないからである。まず象徴的なデータを紹介しよう。

「無視された人に声をかける」二二%
「無視した人に声をかける」一三%
「自分の友達に話す」三三%
「先生に話す」三%

「つぶやきに耳を傾ける（傾けてほしい）」、「本音で話す（話してほしい）」
「生徒の長所を見つける（見つけてほしい）」
ただし例外がある。「生徒（先生）と」一緒に時間を多く」である。教師の五二・六%が選択するが、生徒は二二・九%しか望んでいない。理解してほしいが一緒にいたくはないということか。生徒の選択基準に矛盾があるようだ。このズレは、生徒が「自分でできること」として、教師が「生徒に期待すること」として選択した項目の間でさらに拡大する。

教師が生徒に期待する上位3種は「友達の良さを認め合う」、「見て見ぬふりをしない」、「いじめを絶対許さない態度」である。生徒が自分でできる上位3種は、「絶対いじめをしない」、「イヤなことはイヤという」、「何でも話せる友達関係を作る」である。

教師は積極的にいじめをなくす行動を期待し、生徒は自分がいじめられないことを最優先する。これも生徒の身勝手さとみなすべきか。その判断の手がかりとして、クラスメートが無視されるのを見て見ぬふりをする人の理由」についての調査結果を紹介

クラスメートが「おはよう」と教室に入ってきたら友達が無視して教室を出て行くのを見たときどうするか、との問いに「すぐする」と答えた割合である。「友達に話す」が三三%あるのに対して「先生に話す」は僅か三%。尺度の選択肢は他に「様子をみてする」「場合によってする」「しない」があるが、「様子」と「場合」をあわせても、「先生に話す」は四三・九%と少数派である。他方「友達」は八二・三%と圧倒的多数派。

同じ状況で、「自分が無視された場合」を質問した。自分のことであるため、「そうする」「たぶんそうする」「あまりそうしない」「そうしない」を尺度にした。結果は、「先生に話す」ことを「そうする」のはわずか六%、「たぶん」をいれても一六・五%。

この結果をどう判断すべきか。「無視」という友人関係の軋轢だから教師の出番ではない、と考えることもできる。そこで調査では、より犯罪に近い「クラスメートのズックが捨てられるのを見たとき」と、「自分のズックが隠されたとき」の判断を求めた。

「クラスメートのズック」では、「先生」に「すぐ話す」は一三・一%と「無視」より多いが、「友達」に「すぐ話す」は三六・八

したい。

「自分も無視されるから」六一・三%
「注意しても解決しない」五五・四%
「誰かに相談しても解決しない」四八・四%
数字は「そう思う」と「やや思う」の和だが、生徒の六割が「自分も無視されること」を恐れ、半数が相談しても、注意しても、解決しないと判断している。生徒に見て見ぬふりを装わせるのは、無関心ではなく、恐怖感と不信感である。「ズック」の場合も調査したが、「自分の物が隠されるから」の五九・六%を代表に、いずれもほぼ同じ割合である。この恐怖と不信の心がある限り、いじめ解決にむけての積極的な行動を教師が期待しても、生徒が応えることは難しい。

3 教師を支える人の間づくり

いじめをなくすために生徒ができると思う3大要素は、自分がしない、嫌だとはつきり言う、何でも話せる友人関係。教師ではなく友への信頼が基盤ということか。現代の中高生にとっての友人関係の重さは、多くの調査で確認されている。本調査でも相談相手に友人がある割合が圧倒的に高い。教師より友人関係がいじめをなくす選択肢の上位にあることは理解できる。だが問題

いじめ—なぜ生徒は教師に相談しないのか

—「いじめ調査」を通して浮かび上がった学校対応の問題

で、両者の差はやはり大きい。「様子をみて」と場合によって「をあわせれば」「先生」も五五・六%と過半数を超えるが、「友達」は八一・五%。信頼感の差は埋まらない。

自分のズック」ではどうか。「先生に話す」ことを「そうする」は三九・一%と増え、「たぶん」と合わせると六四・五%とかなり多くなる。だが、「友達」の「そうする」は六二・四%、「たぶん」をあわせた八三%と比較するとやはり少ない。

生徒の三人に一人は自分の靴を隠されても教師に話をしない。しかもこの調査は、大都市ではなく伝統的な地域社会の絆と人間関係が残るとされる秋田県内小都市での調査である。この結果の意味は重い。なにが先生と生徒の間の関係を阻んでいるのか。

2 「いじめない」と「許さない」の差

調査ではいじめをなくす「ために」、①先生と生徒が互いに相手に望むこと、②生徒が「自分でできること」、③教師が「力をいれたいこと」について、ほぼ共通する10〜12種の選択肢を用意し、「3つまで」選んでもらった。その結果、「教師自身が力を入れた」と「生徒が教師に望む」では、教師と生徒ともに次の3種が上位に選択される。

いじめ—なぜ生徒は教師に相談しないのか

—「いじめ調査」を通して浮かび上がった学校対応の問題

馬居提言を受けて もはや教師だけで 勝負するのは、黒 船に刀で向かって いくようなもの

東京都杉並区立和田中学校長 藤原和博

結論から言おう。

もはや、学校を教師集団だけで運営するのは限界なのである。

なにより、地域社会がほとんどの都市部で崩壊している事実を目をつぶることは出来ない。そこで生活する多様な職業の大人に揉まれる機会がないから、子ども達は、異質な他者とのコミュニケーション技術を磨くことなく、カラダだけ大人になっていく。「異質な他者とのコミュニケーションが不

がないわけではない。二点指摘したい。

その一つは、いじめは友人関係の中で生じる現象であることを忘れてはならない。友人への依存は、その関係の解消への不安がいじめの温床になることを意味する。また、友人関係が他人との軋轢を恐れる意識や行動様式と結びつけば、無関心を装う態度の温床になる。友人関係が限定された人達の中で維持されるなら、その関係の外にいる人達への係わりを躊躇させる原因になる。さらに、類似した少数の友人関係の中で自己形成をする傾向があるとすれば、その意識と行動様式の幅もまた狭いものとなる。まして、友人関係が同年齢のクラスの間関係で形成されるなら、一人の間として自立を前にして生じる思春期固有の悩みや問題を克服するモデルをどこに求めることになるのか。

このように考えるとき、友人関係の重視という選択自体の問題性を指摘せざるを得ない。そして、このような視点を裏付けるのが、いじめをなくす上で積極的な行動を要する選択肢を選ぶ生徒が非常に少ないことである。これが二つ目の問題でもある。すなわち、先に確認した、見て見ぬふりを

する理由とともに、親しい友の範囲を超えた人間関係に関わることを避ける意識と行動様式を改めることなしに、生徒の中に広がるいじめられることへの不安感やいじめが生じた際に装う無関心を払拭できない。何よりも、いじめをなくせないとみなす屈折した正当化への欲求を克服することはできない。その意味で、教師の果たす役割は大きい。

生徒はつぶやきに耳をかたむけてくれることを教師に求めている。本音で話して欲しいとも、長所を認めてほしい、とも思っている。教師の積極的な対応よりも、自分たちを理解してくれることを望んでいる。身勝手な要求かもしれない。だがそれは、先生は自分のことを理解してくれていない……との不信感と表裏の関係にあるといえない。

教師が生徒に期待する内容が、いかに正論でも、その内容の有用性と実現可能性が保証されない限り、生徒が選択することは困難である。実践するのは生徒であり、それによって生じる不利益を引き受けなければならぬのも生徒だからである。その意味で、教師は有用性と現実性を説くことから始めるべきか。否である。調査結果が示すの

得意」という表現が分かりにくければ、子どもの視点から「自分と異なるものをキモイ、ウザイ、死ぬー」と遠ざける傾向が強い」と言い換えてもいい。つまり、人慣れしないで育つわけだ。

いじめの発見が遅れるのも教師の信頼感の問題ではない。耳をそばだてたとしても、馬居論者が指摘する通り、生徒は教師には言わない。もちろん、親にも。

馬居教授は指摘する。「類似した少数の友人関係の中で自己形成をする傾向があるとすれば、その意識と行動様式の幅もまた狭いものとなる。」

ならば、この逆の状況を学校の中につくることができない。しかも、教員以外の多種多様な人々を迎え入れて、学校の外の地域社会が多様な人間との関係を保証できなくなったのだから、そのかわりの地域社会を学校の中に作り出すしかないだろう。

そのモデルが和田中学校での2つの実践すなわち、「よのなか」科という連続公開授業と「地域本部」という学校支援組織を学内に設置する試みだ。

「よのなか」科は年間に30回ほど行う校長特別授業で、毎回、正解が一つではない課題

は、教師と生徒の間にある距離の大きさである。これを縮めることから始めるしかない。閉じた心を開く迂回を避ける限り、生徒は教師の言葉を受け入れることはできない。

しかし、他方で、生徒は言葉にならない声で、教師が自分達の心を抱いてくれることを望んでいることも指摘したい。それが「つぶやき」「本音」「長所」にこめられた生徒の意思と考える。自らの思いが理解されているという実感が育まれるとともに、教師の語る言葉の重みを自己のものとする基盤が形成されよう。言葉の有用性と実現可能性は、その言葉を語る人への信頼性によって支えられることを確認しておきたい。

問題は、いっしょの時間を生徒は教師ほどには求めていることである。一対多数の関係を避けえない教師のみで、この課題の解決を担えるものではない。生徒と接する先を生きる人としての全ての大人に投げられた課題とすべきである。生徒だけでなく、教師もまた多くの人たちに支えられてこそ、この困難な課題を担うことが可能になる。そのモデルを、藤原校長が抱いた和田中の「よのなか」科と「地域本部」に求めたい。

を80名の生徒と40名前後の大人がともに討論する総合学習だ。

また「地域本部」は、PTAとは別に60、70名のボランティア(教師になりたい学生やPTAのOB・OG)を組織し、教師がやるには余計な仕事だが生徒の生活環境にとつては必須の活動を支えている。土曜日の学習機会を「土曜寺子屋」で、放課後の居場所を図書室の開放で、というように。そこに集う大学生のお二いさん、おネエさん、図書室のオバちゃん、オジちゃんと生徒達が「ナナメの関係」をつくれるよう工夫しているのだ。親子や先生・生徒のような「タテの関係」でも、友だち同士の「ヨコ」(タメ)の関係でもない、昔、地域社会に有り余るほどあった「ナナメの関係」である。「ナナメの関係」こそが、子どものコミュニケーション技術を揉みほぐす。親や先生にも言えないことを伝えたりもするだろう。

学校を教員だけで経営しようとするのは誤りだ。

学校を地域に開放するのではなく、学校の中に地域社会を再生せよ!

<http://www.yononaka-net.com/mypage/model/index.php>

「いじめ」発見・対応の 学校システム構築

学校マネジメント

2007年4月号 Vol. 46, NO. 601

「いじめ」に関する最近の傾向
現代のいじめのバリエーションが広がっている原因について(山脇 由貴子) 閉鎖的な情報社会にとらわれてしまった子供(勝方 信一) 「いじめ」は「巧妙」になっている(上木 信弘) 「いじめ」解決には、特別支援教育の視点が必要である(甲本 卓司) いじめは「なれ合い」学級で起る(吉原 尚寛) 狭い世界の中で起るいじめ(浅川 清)

「いじめ」発見・対応のシステム構築 II ポイントはどこか

提言 いじめへの対応に学校がかかえる二つの根本的欠点を克服して…… 向山 洋一 1310
向山提言を受けて 学校計画の中に、具体的なシステムが明記されているか…… 井上 好文 1310

「いじめ」調査を通して浮かび上がった学校対応の問題

提言 教師と生徒のあいだを開き拓く多様な人の広がり…… 馬居 和政 1714
馬居提言を受けて もはや教師だけで勝負するのは、黒船に向かっていくようなもの…… 藤原 幸博 1714

「いじめ」発見・対応のシステム構築 I ポイントはどこか

「教育相談」をするいじめへの対応
「コーピング」を中心とした学級経営
「集団づくり」で規範意識を育てる
青神松 信和直 222018
坂谷尾 信宏博 222018

「いじめ」発見・対応のシステム構築 III ポイントはどこか

「管理職がする教師力のチェックポイント」
「教育力の弱いクラスで起るいじめ」
「甘んじている教師のクラスで起るいじめ」
「規範意識の指導が弱いクラスで起るいじめ」
「叱り方がまずい教師のクラスで起るいじめ」
小星林野 治義裕 282624
村林野 治義裕 282624

「いじめ」に歯止めをかけられる教師の教育力

教師だからこそ問われる心のケアと授業による学級づくり
「いじめ」加害児への指導・効果があがる方法
松岡谷嶋 宏祐瑞 343230
岡谷嶋 宏祐瑞 343230

私の体験談・深刻で長期の「いじめ」にどう向き合ったか

「子どもと向き合う」ということ
「なくそう」とするのはなく乗り越える勇気を支える聞き方を!!
「いじめられた生徒の味方に徹せよ」
「いじめられ続けている生徒の味方に徹せよ」
長谷川 博 42403836
川富 博 42403836

あの人は「いじめ」にどう向き合ったか

「いじめはいつでもどこでも起る」
大西実践にみる「いじめ」への指導
大和久 勝 44

向山実践にみる「いじめ」への指導

義家実践にみる「いじめ」への指導
千大 葉森 4846

教委発行の「いじめチェック表」を見て思うこと

資料を活かす、教師の感性が重要
教委は、いつから臨床心理家のしもべになったのですか
なせ、十二年前の教訓が生かされないのか?
杉山 隆一 53525150

「学校現場としての言い分」

「いじめ」に関する報道への不満点
「いじめ」に関する報道への不満点
嶋成西 崎田林 喜幸 57565554
崎田林 喜幸 57565554

いじめの教材化・授業化—どんな実践があるのか

児童生徒が主体となって取り組むいじめ防止の取り組み「ふれあいトーク」の実施
子どもとの信頼関係を築くために、出会いから三日間を大事にした
いじめ対策とゼロ・トレランス
藤内井 千恵美 61605958
内井千 恵美 61605958

教育バウチャー—いやでも? 学校が変わる仕掛け

教育バウチャーとは
教育課程改定と学校経営の改革点
「基礎性」の意義と効用
福井 秀夫 62

学校研修を刺激する処方箋

誰が、教育の第一義的責任者か
「割れ窓」理論の生徒指導—ゼロ・トレランスが学校の秩序を回復する
「ゼロ・トレランス」方式に対する誤解
小森 幸彦 64
森 幸彦 64

「危機管理」は管理ではない。普段の仕事の中こそ「危機管理」はある

「危機管理」は管理ではない。普段の仕事の中こそ「危機管理」はある
「地域の声」と学校はどう向きあうか
伊原 正俊 70
原 正俊 70

「いじめ」発見・対応のシステム構築 IV ポイントはどこか

「学校情報」3分話の知的ネタ
「校長先生の講話原稿」漢字は全部でいくつある?
「ゆとり教育」私が真犯人? 1
「挨拶の困る、教育再生会議第1次報告」
「管理職のための「教育レシビ」と隠し味」
寺脇 弘行 76
脇 弘行 76
光岡 洋一 78
岡 洋一 78

表紙2・グラビア1
食育のための学校ガーディニング 1 大風秀康
グラビア2・扉
学校に伝統文化の活動を 1 中村 哲

色紙4
親向け教育情報誌ウォッチング 1 明石要一
表紙3・4
日本音楽と日本文化 1 田中健次